

「新編 一宮町史」編さん事業の活動報告 No.1

民俗調査 (東浪見寺 軍荼利祭)

町では、令和4年度から10年計画で新たな町史『新編 一宮町史』の編さん事業を行っています。

旧「一宮町史」は、昭和39年(1964)に刊行され、60年近くが経過しています。

地域のアイデンティティである郷土の歴史を後世に伝えていくべく、編さん委員会を中心に調査活動を進めています。

このコーナーでは不定期に、その調査活動を紹介していきます。今回は東浪見寺・軍荼利祭の民俗調査を紹介します。



▲東浪見寺本堂と参詣者

軍荼利山東浪見寺は天台宗の寺院で、創建年代は不明ですが、寺伝によると聖徳太子(厩戸王)が東国鎮護のために軍荼利明王像を安置し、大同5年(810)に行基が再刻したものが現在の本尊であるといわれています。

ご本尊の軍荼利明王立像は県指定有形文化財に指定(昭和33年)されています。平安時代末期から鎌倉時代初期の作と推定されており、寺伝とは年代のずれが生じています。

このご本尊、元は一面八臂二足(顔が一つ、手が八本、二足)の像容でしたが、明治初年の廃仏毀釈の影響で六臂は切り取られ、胸前の二臂のみが残されています。このご本尊は年に一度、1月の軍荼利祭で御開帳されます。



▲軍荼利明王立像



軍荼利信仰は江戸時代中期、地曳網漁の発達によって盛んになったといわれています。祭礼の軍荼利祭は毎年1月28日に行われており、東浪見地区の方を中心に多くの方の参詣があります。大正時代初期には金棒引きを先頭に着飾った稚児たちや有志による踊子が長い列を作って石段を登っていたそうです(「ふるさと」1981年)。

現在は午前10時、午後1時30分に護摩焚きが行われ、午後の護摩焚きの際には天狗が登場します。天狗に頭をなでられた子どもは病気をしない、といわれています。

令和6年3月号

なお、本堂に至る道中の仁王門に安置されている仁王像は、地域の方々のご尽力により、昨年修繕が行われました。

現在は装いを新たに参詣者を見守るように佇んでいます。



▲仁王門と仁王像
(左：吽形、右：阿形)

【問合せ】教育課

(学芸員・江澤一樹)
☎(42)1416